おひさま

まなみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おひさま

【Ｎコード】
Ｎ５８７６Ｚ

【作者名】
まなみ

【あらすじ】
平凡な中学生、島崎桃代。いつもの仲間とは、ずっと一緒だと思っていた。
中学三年生。
それぞれの道が、別れはじめる。
ほのぼの青春ストーリー。

はじまり

テレビから、天気予報の威勢のいいおねーさんの声が聞こえる。今日の天気は快晴だそうだ。カーテンの隙間から入ってくる太陽の光。予報は外れることはないだろう。
朝食のパンを食べたあとは、眠たい目をこすって、洗顔歯磨き。トイレに行ったあとはパジャマを脱いで、制服に着替える。今日はうっすらと化粧もしてみた。髪型はアップのおだんごにする。なんだ、結構似合うじゃんあたし。あ、携帯が震える。菜花からだ。
『今日は学校間に合う！お迎えよろ（はあと）』・・・了解。すぐに返信をうつ。あたしはお気に入りのリュックを背負って、靴を履いた。今日は菜花を迎えにいかなきゃいけない。余裕をもって行かないと。玄関の扉を開けた。まっ青な、朝の空が広がっていた。

・・・あまりにも平凡な、あたしの日常。

幼なじみ

あたしの家を出てから五分歩くと、古いアパートがある。二階の一番端の部屋を見つめながら、電話をかける。ワンコールで、慌てた声が聞こえた。

『桃？もう出るから！』

あたしが喋る暇なく電話を切られた。それと同時に、私が見つめていた部屋から一人の女が出てくる。幼なじみの菜花（なのか）だ。

「桃おはよぉ～」

「おはよ、菜花。あと十分で始業だよ」

「そのまえにコンビニ寄る！朝飯まだなの」

菜花は手鏡を見て、髪を整えながらそういう。あたしは菜花のいうとおり、学校から一番近くのコンビニに寄ってあげた。菜花はパン二つと紙パックの野菜ジュースを買う。あたしはミルクティーを買った。

コンビニを出て、さっそく菜花は食べ始める。あたしも飲もうと、ストローを差した。そのとき、自転車が来てあたしと菜花の目の前で止まった。

「あ、翔ちゃん！」

菜花が嬉しそうな声をあげる。あたしもその顔は嫌というほど毎日見ている。

「よう、桃代、菜花」

幼なじみ二人目、翔（しょう）。

「翔ちゃん、遅いよ。あと五分で遅刻だよ！」

「うっせえ、わかってるっつの。あ、じゃあ菜花、そのパン一つくれ」

「いーいーよ。チョコクロ？レーズン？」

「チョコ」
翔はそういい菜花からチョコクロワッサンを奪う。翔はあたしからもミルクティーを奪って飲んだ。
「ちょっと、あたしまだ飲んでないんだけど？」
「いいじゃん別に。今度なんか奢るから」
翔はそれだけいい、何でもないふうに、あたしにミルクティーを返した。

・・・全然良くないよ。あたしは翔が一度くわえたストローを見つめる。なんか変態ぽいけど。それよりこれって、間接チューじゃん。まぁ、翔は別になんとも思わないんだろうけど・・・。

「翔ちゃん！パンとティーあげたんだからチャリ乗せて」
「三人乗り？無理、無理」
「あんたが歩けばいいんじゃん」
「おい桃代ふざけんな！」
結局、三人乗りの方法をいくつか試しているうちに始業のチャイムが鳴った。遠くから聞こえた。バカみたい。でもそのバカみたいな日々が、あたしらには楽しくて仕方がない。

「えーっと、欠席は・・・片岡翔・・・佐々木菜花・・・島崎桃代ー・・・」
「はいはいはいはい！片岡いますよ、います！」
「なのかも桃もいまーす！」
「アウトに決まってんだろ」
教室に入ると、出欠がすでに取られていた。ああ、また遅刻になっちゃった。菜花を迎えに行くといつもこうなる。
「お前らな、三年になってもう二週間だぞ？受験のことも考えねえといけねえんだから、けじめはつけろ」

担任にそう言われる。菜花も翔もへそを曲げた。あたしもうんざり。中学三年生に進級してはや二週間。それから耳にタコができるほど、『受験』だの『進路』だの『高校』だの。覚悟はそれなりにしていたけど、そればっかり言われると、生徒は鬱になってしまう。あたしと翔と菜花は席に着いた。席も近くだ。

「こないだ配った進路希望調査票、提出今日までだぞー。未提出のやつは放課後でもいつでも持ってくるように！」

担任はそれだけいい、教室を出た。

進路

朝の学活が終わったあと、あたしと菜花、翔と、そしてもう一人の幼なじみ、啓介と机を囲んだ。手にはそれぞれの進路希望調査票を持っている。
「いーい？いっせーのーでっ！で、見せるんだよ？」
「なんで俺まで・・・」
「いいから！どうせなら四人一緒に、同じ高校行きたいでしょ？」
菜花は啓介にそういい、さっそくかけ声の音頭をとった。・・・いっせーのーで！四人は一斉に調査票を机の上に表向きに並べる。
「・・・見事にみんなバラバラだね」
「啓介・・・お前の頭で東高ってマジかよ」
「俺はこれからやるんだよ。つか誰もおまえに言われたくない」
「ええー！三人とも菜花にあわせてよぉ！」
第一希望欄には、あたしが中レベルの南高、翔が南高より下レベルの西高、啓介が県内トップクラスの東高、菜花が県内トップクラスの底辺校、北高の校名が、それぞれ書かれていた。
「なんでこう、見事に東西南北に分かれるかな？」
「菜花、『東西南北』って言葉知ってるんだな・・・」
「翔ちゃん、本気で感心するのやめて」
「あたしは嫌だよ、北高」
「俺もパス。そこしかいけねえって、菜花どんだけバカなんだよ」
「あはは！」
「笑ってる場合ちゃうやろ」
翔は突っ込むときは、何故か関西弁になる。
「ていうか、何でそこまでして一緒の学校行きたいんだよ」
啓介が菜花の調査票を見、鼻で笑いながらそういった。菜花の第二

希望欄には、未定（ハート）と、赤いペンで書いている。
「菜花の青春、桃、翔ちゃん啓ちゃんなしでは始まらない！」
菜花はあたしの手首をいきなり掴んで、そういった。翔の手首も掴んでいる。・・・あ、翔、すぐに放した。あたしはそれを見て、少し複雑な気持ちになった。
「俺は東以外考えてねえから。一緒の学校行く気なら、まずお前らが自分の学力上げろよ」
「おまえ何様だボケ！」
「そうだそうだー！」
「最低・・・」
啓介・・・自分だって、そんなに頭良くないくせに！この中では一番いいだけで。いつからあんなに嫌な態度とるような奴になったんだっけ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5876z/

おひさま

2011年12月21日22時53分発行